

クラリネットとテナー・サクスをみごとに吹き分けるペブロフスキーの最新作

クラリネットという楽器が好きで、LPでもCDでも見つけるとよく買うのだが、近年アメリカでクラリネット奏者の数が少なくなってきているのが淋しい。パディ・デフランコは80歳を超えて頑張っているが、元テナーのエディ・ダニエルス、ユニークなドン・パイロンなどがいるが、いちばんクラリネットらしいまるやかで艶っぽい音をしていて好きなのはケン・ペブロフスキーだ。その上、テナー・サクスも味わい深くてうまいときているから文句なしだ。本アルバムはその両方を堪能させてくれる。テナーを吹くと、ホワイト・コールマン・ホーキンズがズート・シムズがスコット・ハミルトンか、といったような温かいトーンで、線の太いゆったりした響きのプレイをみせてくれる。しかし、聴いている中に誰とも違う個性的な吹き方であることがわかってくる。

彼はこれまでコンコード・レコードへの吹き込みが多く、コンコード・ジャズ祭などに出演してきた。たしか日本へもコンコード・ジャズ祭で来日したのを聴いた記憶がある。

また、2001年にはJVCジャズ祭ニューヨークのプログラム“ソンドハイム&ジャズ・サイド・バイド・サイド”に出演し、カーネギー・ホールで演奏した。ジャッキー&ロイ、モーリン・マクガヴァン、ニーナ・フローリン、カート・エリングといった歌手とともに出演し、スティーヴン・ソンドハイムの曲を素材にして演奏していたが、ペブロフスキーのクリアーなクラリネット・ソロが印象に残った。

いまいちばん活躍しているクラリネット奏者だが、このCDで、テナー・サクス奏者としての評価も高めるに違いない。

本作はアルバム・タイトルが「メモリーズ・オブ・ユー」となっているが、この曲名を見れば、誰だってクラリネット・キングだったベニー・グッドマンを思い出すだろう。ぼくだってそうだ。この曲はベニー・グッドマンの演奏で有名になり、とくに映画『ベニー・グッドマン物語』の中で演奏されて、さらに印象を深めた。ちょっと珍しいレコードにはローズマリー・クルーニーの歌をフィーチャーしたグッドマンのレコードもあった。ケン・ペブロフスキーのアルバムは「メモリーズ・オブ・ユー」で始まるので、クラリネットでどんなプレイをするのだろうか、と思ってプレイヤーのスイッチを入れると、なんとテナー・サクスの演奏なので、一瞬びっくりしたが、それがまたすてきなプレイなので、座り直して聴き直してしまった。この曲をテナーでこんなにみごとにプレイしたレコードをこれまで聴いたことがなかった。

その上、これで終わりかと思ったら、最後の12曲目に、今度は「メモリーズ・オブ・ユー」をクラリネットで演奏しているのである。このちょっと聴き手をはぐらかしたアルバム構成のうまさに感心してしまったが、これは果たしてプロデューサー原哲夫のアイデアなのか、それともペブロフスキーのアイデアなのであろうか。それにしても洒落たアイデアには違いない。「メモリーズ・オブ・ユー」に始まり「メモリーズ・オブ・ユー」に終わるという組曲風の構成であり、彼は全11曲のうち、テナーで7曲、クラリネットで4曲演奏している。最後にクラリネットで「メモリーズ・オブ・ユー」を演奏して幕を閉じるというのは、なかなか心憎いアイデアだと思う。

選曲がまたいい。よく知られたスタンダード・ナンバーが中心なので、一曲一曲聴き進むのが楽しみだし、原曲を知っていると、どんな演奏を展開するのか、ちょっと気になってくるし、前もって予想している思いをめぐらすことができるので楽しみが倍加するのである。

1曲目の「メモリーズ・オブ・ユー」は聴きなれたメロディだが、テナー・サクスで聴くと、実に新鮮だ。あの百歳まで生きた黒人ピアニスト、

- |   |
|---|
| <b>Memories Of You</b><br>メモリーズ・オブ・ユー<br><b>Ken Peplowski Quartet</b><br>ケン・ペブロフスキー・カルテット |
| <b>1. メモリーズ・オブ・ユー</b><br>Memories Of You ( E. Blake ) ( 5 : 31 )                          |
| <b>2. アイル・ビー・シーイング・ユー*</b><br>I'll Be Seeing You ( S. Fain ) ( 3 : 48 )                   |
| <b>3. ブライト・モーメント</b><br>Bright Moments ( R. Kirk ) ( 5 : 06 )                             |
| <b>4. イン・ア・センチメンタル・ムード*</b><br>In A Sentimental Mood ( D. Ellington ) ( 6 : 50 )          |
| <b>5. ドリーム・ダンシング</b><br>Dream Dancing ( C. Porter ) ( 8 : 19 )                            |
| <b>6. ラスト・ナイト・ホエン・ウィ・ワー・ヤング</b><br>Last Night When We Were Young ( H. Arlen ) ( 4 : 41 )  |
| <b>7. 春の如く</b><br>It Might As Well Be Spring ( R. Rodgers ) ( 7 : 48 )                    |
| <b>8. ロータス・フロッサム*</b><br>Lotus Blossom ( K. Dorham ) ( 5 : 05 )                           |
| <b>9. バット・ノット・フォー・ミー</b><br>But Not For Me ( G. Gershwin ) ( 7 : 31 )                     |
| <b>10. プア・バタフライ</b><br>Poor Butterfly ( R. Hubbell ) ( 6 : 26 )                           |
| <b>11. メモリーズ・オブ・ユーII*</b><br>Memories Of You * ( E. Blake ) ( 6 : 52 )                    |

**ケン・ペブロフスキー** Ken Peplowski ( tenor sax & clarinet\* )  
**テッド・ローゼンタル** Ted Rosenthal ( piano )  
**ゲイリー・マッツァロピ** Gary Mazzaroppi ( bass )  
**ジェフ・ブリリンガー** Jeff Brillinger ( drums )

録音：2005年11月17、18日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

©© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊  
Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan  
Recorded at The Studio in New York on November 17 & 18, 2005  
Engineered by Katherine Miller  
Mixed and Mastered by Venus 24bit hyper Magnum Sound :  
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara  
Front Cover：© Irina Ionesco / G. I. P.Tokyo  
Artist Photos by Mary Jane　Designed by Taz

ユービー・ブレイクの代表作だ。79年には彼の半自叙伝的なミュージカル「ユービー」が上演され、ぼくも観たが、自ら出演し、元気に歌ったりピアノを弾いたりしていた。

2曲目の「アイル・ビー・シーイング・ユー」はサミー・フェインが1943年に書いた美しい曲だが、これを甘くやさしくクラリネットで演奏しており、クラリネットの抒情的で変化に富む音色とトーンをうまく生かしている。彼はクラリネットの魅惑的な吹き方を知り尽くしているようだ。それでいて、テナーの場合と同様、誰のものでもない自分独自の吹き方を示しているから、とてもフレッシュに聴こえるのである。

「ブライト・モーメント」はテナー・サクスで演奏したメロディの美しいローランド・カークの曲で、親しみやすさがいい。

4曲目の「イン・ア・センチメンタル・ムード」もよく知られたデューク・エリントンの曲だが、この曲をクラリネットで演奏したのは正解だ。曲のもつペイソスとセンチメンタルなムードを表現するのに、クラリネットは最適だし、どんどんイメージの広がっていく演奏であり、原曲のエリントン・サウンドも生かされていて申し分がない。もしエリントンが生きていて、この演奏を聴いたらにっこりしたに違いない。

5曲目の「ドリーム・ダンシング」、6曲目「ラスト・ナイト・ホエン・ウィ・ワー・ヤング」、そして「春の如く」とテナー・サクスの演奏が続く。「ドリーム・ダンシング」のスインギーな演奏ですっかりいい気分になってしまうが、ペブロフスキーのちょっとざらっとしたホーキンズ的な音とスムーズなプレイはひとときわ輝いている。

ハロルド・アーレンが作曲した「ラスト・ナイト・ホエン・ウィ・ワー・ヤング」は完全なバラードだが、「春の如く」は少し感動的なバラード演奏である。ぼくはこの曲が大好きで、この曲が入っているCDはすぐ買ってしまうクセがある。中学生の頃に観たカラー映画『ステート・フェ

ア」でこの曲を聴いてからいっぺんに好きになってしまった。ペブロフスキーが、この美しい旋律を生かしきっているので大満足だ。

続く「ロータス・フロッサム」はクラリネットの演奏であり、クラリネットの演奏をはさむことで、前後のテナーの演奏まで生きてくるから不思議だ。

テナーに戻っての「バット・ノット・フォー・ミー」はまるで歌うかのようにバースから演奏しているが、ゆったりしたあとのスインギーな演奏とのコントラストがみごとだ。豊かで線の太いテナーのトーンとバックのピアノ・トリオの躍動的なスイングとがびったり合っている。小粋なピアノとどっしりしたベースはテナーをうまくバックアップしているし、出しっぱらないドラムのブラッシュ・ワークも心地いい。

このあと、レイモンド・ハベルが1916年に書いた「プア・バタフライ」が演奏され、聴きなれたスタンダードが、耳に気持ちよく響く。ペブロフスキーも小唄を素材にのびのびと思う存分テナーを吹き鳴らしている。表情も豊かで感情を込めたプレイとはこのことであろう。

さあ、ラストはお待ちかねのクラリネットによる「メモリーズ・オブ・ユー」だ。気負わず、淡々と原曲のメロディに沿って、クラリネットという楽器を輝かしく、美しく響かせて、しっとり演奏し、アルバムを締めくくっている。まさに達人のプレイというべきだろう。

ところで、彼はいま何歳なのだろう。調べてみると、1959年5月23日のオハイオ州生まれというから、46歳の時の録音ということになる。彼が好きなサクスはソニー・スティット、チャーリー・パーカー、ベン・ウェブスター、スタン・ゲッツ、そしてコールマン・ホーキンズだという。なんとなくわかる気がするが、ぼくが調べた本には好きなクラリネット奏者の名前はなかった。

クラリネットという楽器はヴァイオリン、トランペットとともにユダヤ人が最も好きな楽器であり、ユダヤ民族バンド、クレツマー・バンドには大抵クラリネットが入っているし、クラリネット奏者にはユダヤ人が多い。ベニー・グッドマン、アーティ・ショウ、ウォルター・リヴィンスキーがそうだし、映画監督のウディ・アレンは毎週ニューヨークで、ディキシーのクラリネットを吹いていたし、ヨーロッパ・ツアーの記録映画まで作った。『シンドラーのリスト』の監督スティーヴン・スピルバーグは、ポーランドかチェコだかで、この映画のプロモーション記者会見のあと、ジャズ・クラブのジャム・セッションに加わってクラリネットを吹いたという記事を読んだことがある。

ケン・ペブロフスキーも、このロシア的でスキーとつく名前を見たとき、クラリネットを吹くし、てっきりユダヤ人だと思ったのだが、彼を日本へ呼んだことのあるオールアートの石塚氏には、「ぼくはユダヤ人ではない」と言ったという話を小耳にはさんだことがある。それで本名を調べてみたら、ケネス・ジョセフKENNETH JOSEPHだった。ケン・ペブロフスキーは芸名であった。今度来日したら、ユダヤ人かどうか聞いてみよう。ユダヤ人かどうかを聞くことは決して失礼には当たらない。まともなユダヤ人はみんなユダヤ人であることに誇りをもっているからだ。

ペブロフスキーは1960年代末には兄のポーリッシュ・ボルカ・バンドで演奏し、78～80年にはトミー・ドーシー楽団で、80年代には自分のグループで演奏し、85年にはなんとベニー・グッドマンと共演している。その後、ローズマリー・クルーニー、エディ・コンドン、ジミー・マクパートランドらとも共演し、ディキシーの演奏も経験している。ともあれ、彼のようにクラリネットとテナーを鮮やかに吹き分けるプレイヤーは希有だ。

岩浪洋三